

# 松野殿女房御返事

弘安三年九月一日 五九歳

白米一斗・芋一駄・梨子一籠・茗荷・はじかみ・枝大豆・糸びね、<sup>山 葵</sup> 旁<sup>かたがた</sup>の物給ひ候ひぬ。濁れる水には月住まず。枯れたる木には鳥なし。心なき女人の身には仏住み給はず。法華經を持つ女人は澄める水の如し。釈迦仏の<sup>やど</sup>月宿らせ給ふ。譬へば女人の<sup>はら</sup>懐み始めたるには、吾が身には覚えねども、月<sup>ようや</sup>漸く<sup>かさ</sup>重なり、日<sup>しばしば</sup>も屢過ぐれば、初めにはさかと疑ひ、後には一定と思ふ。心ある女人は<sup>男 子 女 子</sup>をのこ<sup>ご</sup>をんなをも知るなり。法華經の法門も<sup>また</sup>亦かくの如し。南無妙法蓮華經と心に信じぬれば、心を宿として釈迦仏<sup>はら</sup>懐まれ給ふ。始めはしらねども、漸く月重なれば心の仏夢に見え、悦ばしき心漸く出来し候べし。法門多しといへども<sup>とど</sup>止め候。法華經は、初めは信ずる様なれども後<sup>と</sup>遂ぐる事かたし。譬へば水の風にうごき、花の色の露に移るが如し。何として今までは<sup>たも</sup>持たせ給ふぞ。是偏に前生の功力の上、釈迦仏の護り給ふか。たのもし、たのもし。委<sup>くわ</sup>しくは甲斐殿申すべし。

九月一日

日 蓮 花 押

松野殿女房御返事